

ハイデッガーにおける無の問題

平田雅

有の問い(Seinfrage)として語り出されるハイデッガーの思惟は、『有と時』(一九二七年)以後、転回(Kehre、現有↓有から有↓現有への思惟の転回)へ向けて、様々な変貌を遂げて行く。この思惟の変貌は、無の問題を中心に据えてみると、一定の方向をもったものとして跡付けることができると思われる。

『形而上学とは何か』(一九二九年)においては、無への問いが問題にされ、無の本質をなす「無の無化(Nichten)」は、「拒否的指示」(abweisendes Verweisen)として捉えられる。この「指示」という側面から言えば、無は、我々人間の現有を、有るもの全体が滑り去って行く不安の中に単独化するという仕方、自らを顕示すると共に、有るものの意味連関をこのようにして破ることに、かえって有るものを、その「根源的開性」において、現有に指示するのである。「無の根源的開性」と「有るもの根源的顕示性」とが同時に生ずることによって、有るものを超越すること、有るものを形而上学的に根拠づけることが、可能になる。

次に、「拒否」という側面から言えば、無は、不安において有るものを我々現有から滑り去らせるといふ仕方、有るものを拒否する。従って、拒否は、先ず第一に、有るものの拒否を意味する。しかし、無の無化によって、現有はかえって、自らの根源的開性における有るものへと指示され、有るものへと駆り立てられ

る。このことは、即ち無自身が、「無の最も固な意味に従って」、自らの顕示を拒否することに外ならない。従って、拒否は、第二に、無自身の拒否を意味する。無化する無は、現有の、更には、形而上学の「深淵的な根底」に留まり、自らの顕示を拒否し、従ってまた深淵的な根底として、形而上学的根拠づけを拒否する。

無化する無は、形而上学的思惟を拒絶するが故に、ハイデッガーの思惟には、形而上学的思惟の放棄と、形而上学の根底への帰り行きとが、要請になる。しかし、これは、あくまでも要請に留まる。何故なら、この著においては、有るものの拒否の指示としまる。無が強調され、無自身の拒否という側面は背後へ退いてしまっているからである。従って、無は、「有るもの側から経験された有」として、依然として有るもの側から、形而上学的に思惟されているといえる。

『真理の本質について』(一九三〇年)では、真理への問いが主題となっている。真理の本質は、有るものをその「隠れなさ」において「有らしめること」としての自由とされ、更に自由は、「脱—存」(Ek-sistenz)即ち「有るもの露現性へと自らを放ち入れること」(aussetzen)に還元される。現有が、有るもの有の開けへと、外存的(aussetzend)現有が自己の主観の内に閉じこもることなく、有の開けへと出で立つ有り方)に自らを放ち入れることが脱—存なのである。この現有の脱—存的自由によって、有るものはその隠れなさにおいて有らしめられるのである。つまり真理とは有るものの隠れなさである。しかし、そもそも隠れなさには、「隠れ」が本質的に属している。真理の「本質に先立って現成する本質」と言われるこの隠れ(非—真理)と、これに属する「有るものそのものの隠し」とは「秘密」と名付けられるが、この真理の

無化する働きとしての「隠し」において、先に見た無の拒否的側面が示され、また無はここでは、「非—真理」の「非」として捉えられている。

そして、この非は、「有の真理の未だ経験されざる領域」への示唆を与える。それ故、この非にして無は、有に共属するものとして予感されている。それにも拘らず、有の真理への問いは、ここでは、展開され得ない。それは、この非にして無が、「有るものそのものの隠し」として、依然として有るものの側から、形而上学的に捉えられているからである。従って、ここでの思惟は、形而上学的思惟と、形而上学的には思惟し得ない有の真理との間を、揺れ動いているといえる。

『形而上学入門』（一九三五年）においては、「何故そもそも有るものが有って、むしろ無が有るのではないのか」という形而上学の根本の問いが主題となる。この問いは、有るもの全体を包括する故に最も広く、有るものの根拠を問うが故に最も深く、また問う者自身を、この問いを問うという「跳躍」(Sprung)に引き入れ、この者自身においてこの問いの「根—源」(Ursprung)を跳出(entspringen)させるが故に、最も根源的な問いとされる。伝統的な形而上学にあつては、この問いの前半の「何故そもそも有るものが有るのか」という問いのみが問われ、その根本の問いは、形而上学の主導的な問いとして、有るものそのもの(Selbst als solches)への問いに留まっていた。これに反し、ハイデッガーが問う根本の問いは、有るもの(Sein als solches)への問いを意味している。

この根本の問いの後半は、無への問いを意味し、この問いによって、有るものは、「非有と有との間の動揺」に陥り、この動揺

の振幅は、非有と無にまで届く。このことと共に、この根本の問いを問う現有自身もまた浮動せざるを得ない。この動揺は、現有を有るものの「跳躍」へと導き、根本の問いは、「有についてはどうなっているのか」という先行的な問いへと導かれる。従って、この跳躍とは、伝統的な形而上学における有るものそのものへの問いから、有るものへの先行的な問いへの跳躍を意味する。根本の問いのこの変貌と共に、ハイデッガーの思惟もまた有るものへの問いへと、変貌する。しかし、ここでの思惟は、有るものから有るものへの通路づけを得ようとする方向、つまり有るものから有るものへの方向を辿るのであり、従って、依然として形而上学的思惟の中に留まっている。とは言え、有るものを問うという思惟のこの変貌は、形而上学から形而上学の根底へと帰り行く最終的な歩みである。

以上のように、『形而上学とは何か』においては、無の無化が、形而上学的思惟の放棄と、形而上学の根底への帰り行きを、ハイデッガーの思惟に要請し、『真理の本質について』では、真理の無化する働きとしての非が、従来の形而上学が忘却していた自らの根底としての有の真理を問う方向に、思惟を変転せしめることを示唆する。また『形而上学入門』においても、無がそこで問われる形而上学の根本の問いを介して、思惟が、有るものへの問いへと、跳躍し、変貌することは、根本的には無の無化によって生ずるのである。無の無化は、このような思惟の様々な変貌を引き起こす誘発力となっており、しかも、ハイデッガーの思惟の内面に尚残存している形而上学的残滓が取り除かれ、その結果生ずる思惟の転回をも、その根底から支える根源的な働きをなすと思われるのである。